

古墳時代人骨に認められた集合性歯牙腫

Compound Odontoma in a Skeletal Remain of the Protohistoric Kofun Period

竹 中 正 巳

Masami TAKENAKA

はじめに

1991年5月、鹿児島県高山町（現在：肝付町）後田に所在する北後田古墳群の発掘調査が行われ、2基の地下式横穴墓が発見された。これらの墓は地下式横穴墓1号墓、地下式横穴墓2号墓と名付けられた。考古学的所見から、古墳時代後期に属すると考えられている。また、1号墓からは2体の、2号墓からは1体の古墳時代人骨が出土している。この発掘調査の正式な調査報告書はまだ刊行されていないが、調査の概要は、中村（1997）によって報告されている。

北後田古墳群の地下式横穴墓から出土した人骨は、南九州の古墳時代人の生活や風習を探る上で貴重な人骨である。1号墓のA人骨には上顎舌側面特殊磨耗が確認されている（竹中ほか；2001、竹中；2005）。また、2号墓からは風習的抜歯の施された可能性の高い若年女性人骨が出土している（竹中ほか；1993）。

今回報告する集合性歯牙腫は、北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨に認められた。この集合性歯牙腫について、古病理学的観察および検討を行ったので、その結果を報告する。

資 料

研究を行った人骨は鹿児島県高山町北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨（男性・熟年）である（図1・2）。集合性歯牙腫は下顎右側切歯と隣り合う犬歯の間の歯槽に確認された。本人骨は仰臥伸展位で軽石製の石棺の中に葬られていた。副葬品には鉄刀、鉄斧や鉄鏃がある。この墓には、A人骨以外にも石棺外に性別不明の壮年人骨1体（B人骨）が遺存しており、合計2体が葬られていた。A人骨は、副葬品から、古墳時代後期に属すると考えられている（中村、1997）。

北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨には、上顎の左右犬歯間の6本の前歯の舌側面に特殊な磨耗痕（上顎前歯部舌側面特殊磨耗 LSAMAT：Lingual Surface Attrition of Maxillary Anterior Teeth）も認められている。6本の前歯の舌側面には、平坦な磨耗面が形成されており、摩りきれて象牙質まで露出している歯もある。咬合は鉗子状であり、この磨耗痕は上顎歯の被蓋が深いために起こる咬耗とは異なる。このような特殊磨耗が生じる一つの可能性として、食事や作業の際に、上顎歯・硬口蓋と舌との間に植物など韌す物を挟み、舌や手を使い、それらを押し引きし、しごく



図1. 鹿児島県高山町北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨（男性・熟年）出土状況

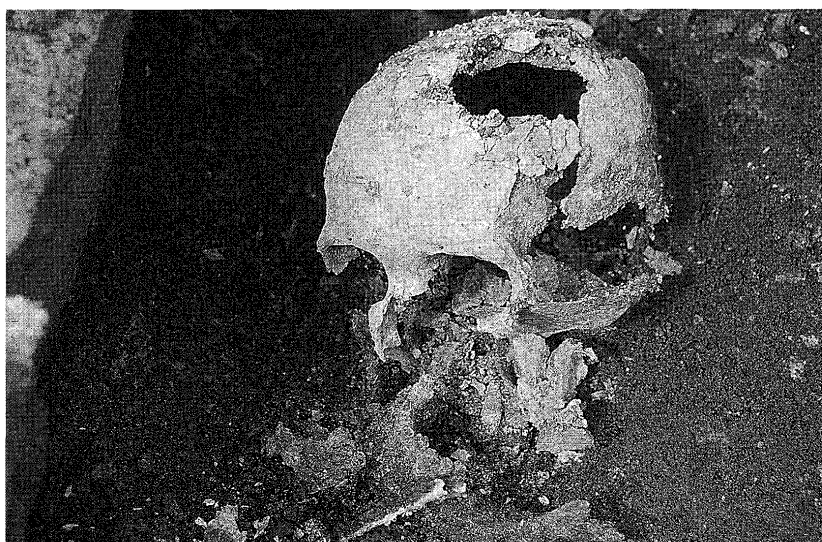


図2. 鹿児島県高山町北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨（男性・熟年）の頭部拡大写真

行為を行っていたことが考えられている（竹中ほか；2001，竹中；2005）。

古病理学的観察結果と考察

北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨の下顎右側切歯と隣接犬歯の間の歯槽に歯の形態をした極小型の硬組織が4個認められる（図3・4・5）。これら4個の硬組織は、歯冠部は白色で丸い形をしており、歯根部は円錐形である。肉眼的には、エナメル質、象牙質、セメント質を備えた極小型の歯の様に見える。大きさは大きいものでも5mmしかない。4個の硬組織の周囲に埋伏歯や歯の欠如は認められない。これら4個の硬組織は、歯を形成する組織が過剰に増殖して生じた歯原性腫瘍の中の、歯の硬組織を主体とする病変である歯牙腫によって生じたものと考えられる。

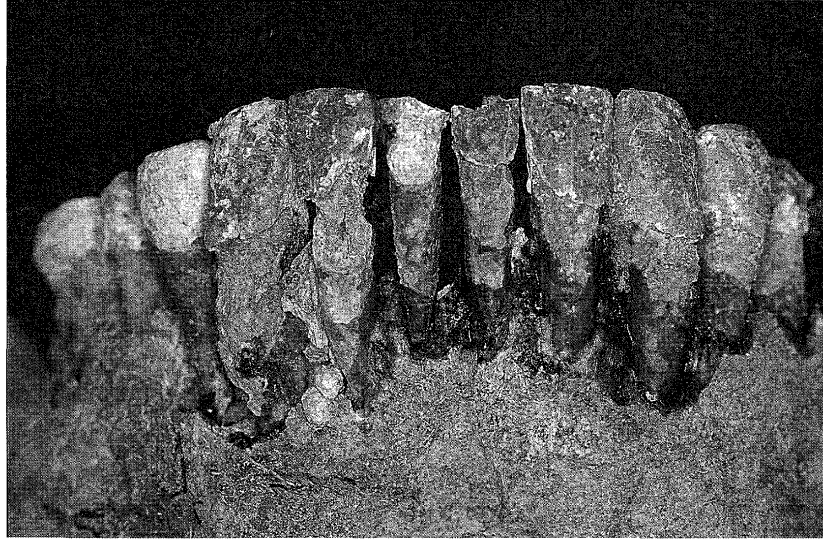


図3. 鹿児島県高山町北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨（男性・熟年）の集合性歯牙腫（下顎右側切歯と隣接犬歯の間の歯槽の唇側面）

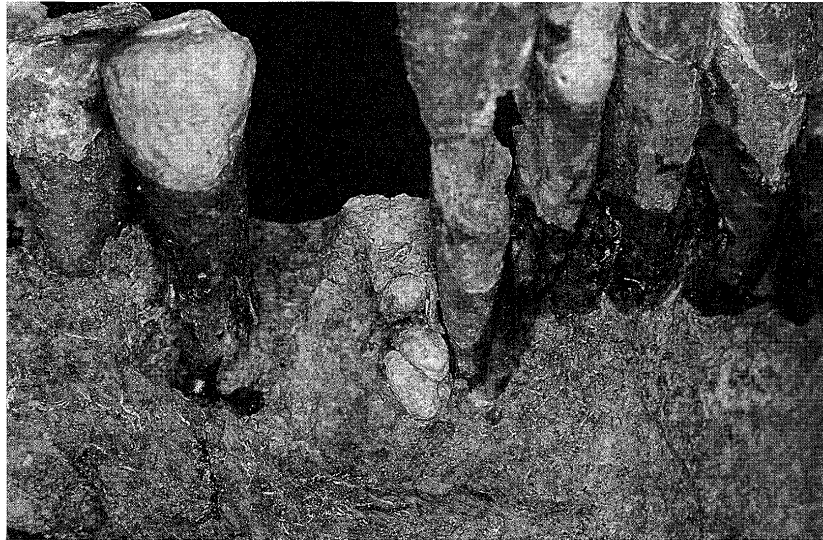


図4. 鹿児島県高山町北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨（男性・熟年）の集合性歯牙腫（下顎右側切歯と隣接犬歯の間の歯槽の唇側面）の拡大写真

歯牙腫は古くからいくつかの型に分類されてきた。しかし、これらの分類の多くは歯牙腫と呼ぶには不適當な、単なる奇形歯とした方がよいものを含んでいた（石川，1982）。近年では、歯牙腫を成熟歯牙硬組織の腫瘍という意味から、複雑性歯牙腫 complex odontoma と集合性歯牙腫 compound odontoma の2つに大別しているが、両者の移行型が存在することも知られている（森，1988）。

複雑性歯牙腫は、石川（1982）によると以下のような特徴が挙げられている。組織学的に不規則な配列をなす塊状の増殖物で、細管構造の明らかな象牙質および小柱構造の明瞭なエナメル質が認められ、またセメント質あるいは無構造の石灰化物のみの場合もある。好発年齢は10歳代で、性差は明らかでない。好発部位は下顎臼歯部で、上顎前歯がこれに次ぐ。臨床的には、小さなものは無

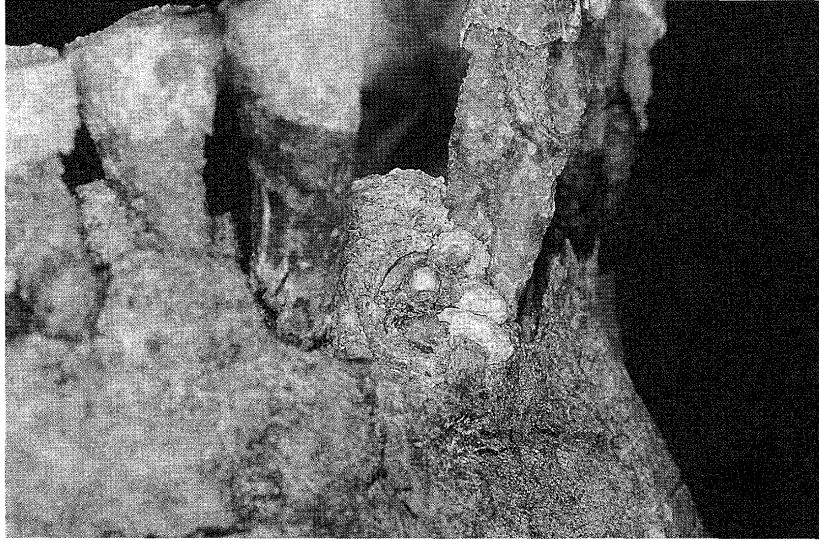


図5. 鹿児島県高山町北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨（男性・熟年）の集合性歯牙腫（下顎右側切歯と隣接犬歯の間の歯槽の唇側面）の拡大写真〔遠心側より撮影〕

症状であるが、乳歯の残存や永久歯の埋伏あるいは欠如を伴うことが少なくない。大きなものは鶏卵大以上に達し、顎骨の膨隆や歯の位置異常を起こす。X線写真では、周囲の骨質と明らかに区別できる塊状の不透過像として認められる。

集合性歯牙腫も、石川（1982）によって以下のような特徴が挙げられている。組織学的には多数の歯牙様構造物からなり、個々の構造物は軟組織で隔てられる。これらの構造物の大きさおよび形はいろいろで、ほとんど正常な外形を示す歯を縮小したように見えるものから、かなり不規則なものまで種々である。好発年齢は10歳代で、複雑型よりも若年者にみられることが多い。性差は明らかでない。好発部位は前歯部、とくに上顎である。臨床症状も複雑型と同様であるが、時には矮小な歯が萌出してくることもある。X線写真では、小さな不透過物が集合して認められる。摘出物は肉眼的にも種々の形の小さな歯牙様物を含み、その数は数個から、時に数百個におよぶこともある。

北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨の歯の形をした極小さい4個の歯牙様硬組織の集合は、それぞれ歯の組織の形態分化が進んでおり、歯牙腫の中でも、集合性歯牙腫と診断される。本人骨の歯牙腫は小さく、患部の膨隆も認められない。生存時、患部についての痛みや違和感などなかったであろうし、集合性歯牙腫の存在についても全く知らなかったと思われる。

これまで、日本の古人骨において歯牙腫が報告されたのは、小片ら（1996）によって報告された古墳時代後期の宮崎県西都市酒元の上横穴墓群6-2号墓人骨（女性・熟年）のみであった。酒元の上の歯牙腫も北後田例と同じく集合性歯牙腫である。しかし、酒元の上例の増殖硬組織はエナメル質以外を主体としている。発生場所は下顎左右中切歯の歯間の歯槽であり、北後田例の集合性歯牙腫の発生部位も近い。

酒元の上例も北後田例も南九州の古墳時代人骨であり、現在のところ歯牙腫の報告例が南九州の古墳時代人骨だけに偏った状況である。しかし、北後田例も、酒元の上例も、たまたま集合性歯牙腫が下顎の前歯部の歯槽に存在し、増殖硬組織が歯槽の唇側表面に露出していたために、容易に発

見でただけであり、日本列島各地の各時代の古人骨資料についてX線写真撮影を行い検討を行えば、必ず歯牙腫の報告例は増加すると思われる。今後、古人骨における歯牙腫の報告例が増加し、発現頻度や好発部位の時代差、地域差、社会階層差や性差等の研究が進展することを期待したい。

引用文献

- 石川梧郎（1982）歯源性腫瘍。石川梧郎監修 口腔病理学Ⅱ。pp.461-530. 永末書店。京都。
- 森昌彦（1988）歯源性腫瘍。宮崎正編 口腔外科学。pp.117-144. 医歯薬出版。東京。
- 中村耕治（1997）北後田古墳群（検見崎古墳群）。高山郷土誌。pp.175-181. 高山郷土誌編さん委員会。鹿児島県高山町。
- 小片丘彦・竹中正巳・峰和治（1996）16号支線道路横穴墓群出土の人骨について。「西都原地区遺跡」西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 22：128-136。
- 竹中正巳（2005）南九州から出土した先史・古代人骨の時代的特徴。先史古代の鹿児島（通史編）。pp.679-692. 鹿児島県教育委員会。鹿児島。
- 竹中正巳・峰和治・大西智和・小片丘彦・染田英利（2001）宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨。えびの市埋蔵文化財調査報告書 29：1-107（別編）。
- 竹中正巳・小片丘彦・峰和治他（1993）風習的抜歯の疑われる古墳時代若年女性人骨。人類学雑誌 101：483-489。

（2006年12月5日 受理）